

る輕進者流の云爲の危険なるは更に酷しきものあり、思想問題の根底其所に存す、吾人は物質文明の弊害を痛感することに依つて事善主義の高調に努めざるべからず、唯物史觀に依つて人類一切の生活條件を構成し得べしとなし、階級闘争を激成する思想を鼓吹するが如く計るは互護協調をして社會生活の本則とするもの、斷じて許さざる所なり、今や舉世滔滔々目先主義、間に合せ主義、便利主義に墮し高遠なる志趣なく深透なる計畫なきは我が國刻下の病弊なり、宜しく人心の伸暢を計り教育制度を改更して層一層實際化ならしめて個性發揮に努め國民教育に於ける機會均等を實現せざるべからず、而して特に政治道德の高唱に依り至誠の本義を明かにするを要す、財政は緊縮を旨とし以て國民資力の増殖に努むべく經濟上喫緊の施設を要する計畫多々ありと雖も金輸出解禁の一事は慎重に昭和の時相を考慮し宜しく速に之が斷行に進まざるべからず、如上の對支外交、思想問題、財政緊縮、金輸出解禁の四大政策解決を實施せんに現に在る如き勢力伯仲せる二大政黨の對抗に依る政界の不安定を以てしては到底望み得べからず、爲に外交は機宜を失し、財政は澁滞を重ね、國民の負擔實に甚しからんとす、然らば如何にか之を打開せん、二大政黨對立して交互に政權を取るは固より政黨政治の理想なりと雖も

實際に當つて必らずしも然るべからず、現に我が政界の實情を示す所の如く其政友自身は民政黨に比し僅少の優勢を持するも一旦民政黨にして少く有利に局面を誘導せんか政友會は立所にして破れん、而も政民兩黨其地位を變へるも亦結果は同一ならん、然り而して斯の如き政界の不安は必ずしも議會解散に依りて一掃し整備し得べきものに非ず眞に基礎牢固なる政黨政治を行はんと欲せば宜く現行選舉制度を改訂して小選舉區制に還元するに非ざれば到底政局の安定は期し能はずと信ず茲に於てか、吾々時弊を憂ふべきもの過去一切の行掛を放擲し私情の忍び難きを忍び適時臨時の策を選み第三黨を樹立し以て刻下の時局に面して現狀打開せんことを期す冀くば前記の諸政策に就て心理を一にする人協調提携して内治外交を作振し昭和維新の實を擧げ國運回轉の實を全うせん事を吾等の祈願切望に堪ざる所なり。

昭和三年八月一日

床 次 竹 次 郎

この第三黨樹立計畫が紫電一閃瞬く間に運ばれた経緯についてはいろいろあるが、それよりも寢耳に水と驚いたのは濱口始め民政黨の人々、いやそれよりもまだ舊本黨系の代議士連中だ

スソこそ御大の一大事とばかり市三郎の床次邸に馳せ参じたが何の事だか夢のやうで薩張り判
らず、大魔誤つきの態、中でも榊田清兵衛、小橋一本、松田源治、中村敬次郎等手飼ひの連中
はあまりに不意の出来事で進退決しかねて泣くやら怒るやら側で見ると目も氣の毒な位ひ、それ
でも翌二日の夜までにこの新黨の傘下に集つた代議士二十四名、交渉團體には今一名と云ふ處
だが兎も角押しも押されもせぬ第三黨が一晩の裡に出来上つた譯である。

これで喜だのは政友會だ、ともすれば曇り勝な政界に今うら、かな陽がさして来た一先づ政
局も安定したと云ふもの、困るのは實同である僅か三名の代議士を以つて政界のキャスナング
ポートは我が手にありと威張つて居たのに、これでは小店の隣に大きなデパートが出来たやう
なものだ、と武藤山治は與太つたが始まらない。

一方非道い目にあつた民政黨ではこゝも懸命になつて、新黨に走らんとする本黨系議員の
足止めに狂奔した。

濱口御大はその病床に一人づゝ呼寄せて口説落を試みるやら、又一方幹部總出で日和見の代
議士の地盤廻りをして、

「選挙の時は民政黨で當選した議員ではないか、それが脱黨とは有権者諸君を賣ものである」
と泣きごとを並べ盛んに苦肉な策をやつたものである。

この間松田源治、中村敬次郎等は西園寺公を訪ねたり、先輩山本達雄に會つたりして遂ひに
「情誼に別れて大義につく」と迎もうまい口實を造り殘留することに決した、つまり濱口内閣
が出来たら政務官の椅子でも貰へると考へた手合のみが殘留といふ事になつたのである。

こうして床次の投げた大きな波紋は一先づ納まつたが、さて納まらんのは例の田中善立、樋
口秀雄、森田茂等の三人組を始め反幹部派である、床次の旗上げに依り愈々戰機熱せりと見
た時此等三人組は遠く北海道にあつて盛んに謀議を凝らして居た、八月月上旬萬般の手筈をき
めた三人組は素知らぬ顔をして東京に歸つて来たものである。

處が忽ちにして三人の手は八方にのびた、田中は愛知組の鬼丸、久野をはじめ豫て懇親の誰
彼に黨弊刷新の決意を打明けて同意を求め、樋口は信州組を手はじめにこれも同志の糾合に努
める、森田は東京の本部にちらと顔を出したきりその足で京都に歸り、自分の邸に川崎安之助
紫安新九郎其他の京坂組を集めて密議を重ねると云ふ譯で彼是三十名位ひは行動を共にする

者がありそうな形勢となつた。

此時東京にあつた田中善立、日頃懇意な大隈信常侯に決意を打明けしんみりと相談を持ちかけたものだ。ところが近頃大分政治に色氣の出で来た信常侯、それは至極結構萬一の場合には後立にもならふと嬉しい返事に田中グンと乘氣になりスワこそ我がことなれりとはばかりに八方に飛脚をとばしいよ。八月二十六日早稲田の大隈邸に、小幸謙吉、降旗元太郎と例の三人組を會合せしめ種々具體案を練り茲に反旗を翻す手筈は完全になつた。

明くれば九月一日、大震災記念日に小寺謙吉を先頭に押立てた不平組は久世山の濱口總裁邸に押込み。

「此際黨の禍根を一掃されては如何」と詰り寄り聞かなければ所信を斷行しかねまじき態度を示したものだ。

そして不平組は政友會との比較對照をなし痛烈に濱口の啓發を試みたのであつた。

曰く、政友會は情熱と仁俠を以つて立つて居るに反し吾黨は冷血無情排他性の中毒だ、これが爲め嘗ては下岡忠治、阪本金彌、木下謙次郎の諸君を逐ひ、大石、尾崎、島田の三先輩をも

去らしめた、又最近はどうだ箕浦翁は後進若槻、江木の爲めに虐殺され却つて政敵元田肇のために救はれたではないか。

と、黙々として聴き入つて居た濱口は、ここまで來ると急に目を伏せ首をうなだれた、そして聲涙ともに咽び泣くといふ眞に迫つた場面を見せたが、結局この意見も幹部の容るゝところとならず、それでは止むを得ずとあつて遂に不平組は決然去つて憲政一新會なるものを組織し、又小寺謙吉は除名處分になつたが別に小寺派なるものを樹つるに至つた。

斯くしてさしも喧騒を極めた民政のお家騒動も一段落の形にあるが果して禍根は根底から斷られたものであらふか、此度の三人組の策動を陰謀呼はりした安達、江木等の幹部も今や澎湃として漲りつゝある眞面目な革新の氣を阻止する事が出来るであらふか、後には反安達派のかちく三木武吉一派も居る、また片岡一派の金ピカ亡者も居る、現に降旗の如きは九月十日の代議會で革新運動の旗上げを言明して居る、其の他現在の幹部を除けば大なり少なり黨の現狀に不満を持たぬ者はない、おまけに影には政府與黨の魔の手が延びないものもあるまい。果せる哉、この御難つゞきの民政黨をいよゝ窮地に追落す時がやつて來た、それは、

十一月京都に行はせられた御大典の盛儀に際し政府の久原房之助は密かに床次を東山の宿所に訪ひ、對支問題に付き政府は貴下の意見を尊重するとまんまと新黨を引入れ、更に憲政一新會を堺卯に招待して、表面對支問題に付き意見の交換と振れ込んだが此れまた完全に手を握つて了つたのである。

斯くして御大典終了の十二月床次は政府諒解の下に愈々渡支決行となり、民政黨の立場は益々逆境に置かれたのである。

五十七、對支外交の紛糾

床次が民政黨を脱して新たに第三黨を樹立するに至つた理由は、裏面はとも角その聲明書にあるが如く幣原外交の消極退嬰、余りの弱腰に愛想をつかしてのことである。

元來床次は對支強硬論者である、だから滿蒙に於ける我が國の特殊權益擁護の爲めには南方政府の反感位ひは屁とも思つては居ない、従つて幣原外交が内政不干渉の美名にかくれて如何なる重大事に遭遇するも常に英米追従の外一步も出でず事毎に英米にしてやられると云ふ府甲

妻なさには殆んど業を煮し、幣原外交は賣國外交なりとさね言外に洩らして居たほどである。

處が去る六月民政黨が田中外交に反駁的な對支聲明を發表するに際し床次の意見を徴して來たので早速床次は自己の主張を述べ大體をうした大綱の下に黨の意見を決定されたいと返辭をして置いた、然し民政黨の舊黨政系では加藤内閣以來の幣原外交と云ふものがあつて、どうも床次とは折合がつかない、折柄南方政府の要人から床次の渡支を頻々として電請して來るので床次も大いに氣を動かし乃公出でずんば天下の蒼生を奈何にせん位ひの好い氣持になつて、黨の大頭株に諮つて見たが、もひとつ煮切ないばかりか憲政系の永井、中野といった中幹部處の支那通は、

「床次顧問の意見は吾々憲政會以來の對支外交の方針を覆へして、政友會の軍門に降るものだから思ひ切らせるがよい」と安達に進言に及んだものだ、そこで安達は幣原に貴下の御意見はといへば勿論床次の意見に反對だと云ふ、それならば丁度好都合だ、床次を北海道々會議員選舉の應援をかねて東北大會に出席して貰はう、其の留守中に民政黨の意見として幣原外交を支持したものを發表しやうと云ふことになり、遂ひに床次が北海道遊説中に政友會の強硬外

交に反對の聲明を發表したのである。

そこで床次が憤慨し遂に脱黨の意を決したのは無論のことであるが一般國民も亦その余りに弱腰なるを非難攻撃し、その無定見を痛罵するものが多かつた、それは相手方の足元を見て弱くもなり強くもなる彼等支那人が民政黨の此の軟弱にして抵抗力なき幽魔的態度につけ込み如何なる非理不法の擧に出でぬとも計りがたい、と云ふのである。

果せる哉、七月二十日南方政府は、日本國民をアツと云わせるやうな亂暴極る擧に出た。

即ち同日を以つて日支通商條約の廢棄を宣言し爾後は無條約國民として「無條約國待遇臨時辨法」なるものを適用する旨の通告をして來たのである。

勿論田中内閣は此の常軌を逸し國際信義を無視したる南方政府の暴擧を受けやう筈がない直ちに馬關條約第二十六條の規定を楯にとつて一方的廢棄の無効を主張し此れを突放したのである。

「参考」 明治二十九年締結の日支通商條約第二十六條。

「條約國の一方は十年の終りに、新定稅則並に通商條款の改正を要求することを得べし。

然れども、最初十年の結末に於て、六ヶ月以内に双方共その要求を爲さざる時は、更に十ヶ年間有効とす、その後の十ヶ年の終末に於てもこれに準ず」

さあ、こうなるに日本の國論は愈々沸騰した、或る者は南方政府の傲慢をせむるあり、王正廷、蔣介石の人身攻撃をするものあり、或は民政黨の對支聲明を賣國外交なりと痛憤するものあり、又田中サーベル外交の拙劣を叫ぶものあり學者、政治家、各種團體等一齊に起つて國內の輿論は全く喧々囂々たるものがあつた。

今其の綜合的輿論を徴すると

從來政民何れを問はず霞ヶ關の連中は英米追隨の外交方針をとり彼等の尻馬に乗せられて、日支親善、共存共榮など、愚にもつかぬ御題目を唱へ姑息退嬰、積り／＼つて遂に彼等支那人をして日本與みし易しの信念を懐かしめ跳梁跋扈の結果南京事件、漢口事件、濟南事件等の天人共に許さざる暴擧をなさしめ今又條約廢棄通告の不法行爲を敢へてなさしむるに到つたのである 東亞の盟主とは偶像の意味か、最大の國辱を受け其の上尙且つ追隨外交に甘んずる位ひなら國軍の必要もなく又國民の後援も無用である、事茲に到つては國際信義も同文同種も

何等の遠慮は要らぬ、凡ては武力の解決に俟たねばならぬ、又昔の三國干渉が再演せらるゝとも玉碎を覚悟して起たねばならぬ、國民に此の決心があつてこそ東亞の平和は保たれ國家を石の安きに置く事が出来るのである、生やさしく戦ふが如くにして戦はず、犬の遠吠に敵を威嚇せんとしても敵が恐れざる場合は戦はねばならぬ、それよりも敢然たる態度を以つて最初より兵火を辭せぬ舉國一致の結束さへ示せば鼎の輕重を問はれる氣遣はない、今回の條約廢棄通告に對する田中内閣の強硬なる態度と實業家が排日排貨を覺悟で終始一貫強硬の態度を示した結果が南方政府に硬軟兩派を生ぜしめた一事を以つても判るではないか。

それと共に軟弱外交の前科者たる民政黨が最初より對支強硬の愛國的聲明をすれば事茲に到らずして日支の紛糾は解決されたに違ひないのである。

此の際我が國は徹頭徹尾飽くまで強硬な態度を持し支那が頭を下げて前非を謝し條約廢棄の通告を取消し濟南事件他二つの不祥事件を解決してからでなければ關稅自主も治外法權の撤廢も一切取合つてはいけない、又濟南の皇兵も絶對に撤退してはならぬ、と云ふのが當時の正論であつた。

斯の如く國民の公憤に依り鞭撻された田中内閣は、深く決する處あり八月二十二日の閣議には野黨の非難を一蹴して、南京政府が條約廢棄の通告を撤回せぬ限り斷じて新局面の展開に應ぜぬことに一決し、之を中外に聲明して大いに積極強硬の氣を吐いたが此れも一時の事で、其後幾果もなく東山省に青天白日旗が翻り、又南方政府に對しても漸時態度を緩和するに到つたのは誠に遺憾千萬のこと、謂はねばならぬ。

五十八、亂舞亂踊の五十六議會

斯くて對支諸懸案は何時解決さるべきもなく益々迷宮化して來るのみである、かて、加へて南北支那の排日排貨は日と共に旺になり我が對支貿易は殆ど停頓の形となつた。

茲に於て我國內に有ても田中サーベル外交を以てしては最早到底此の難局を收拾する能はずとするものが多くなつた、又此時例の滿洲某重大事件、不戰條約文問題等が漸く喧擾を極むに到り議會開會の期日逼迫と共に田中内閣の運命もどうやら怪しく見えて來たのである。

かくして十二月二十四日、愈々第五十六回通常議會は招集せられた、今各派の形勢如何にと

見てあれば、政府與黨たる政友會は二百二十四名、尙準與黨として憲政一新會の七名、實業同志會三名他其無所屬の二、三都合二百三十餘名それにはよくば床次新黨をも引入れて絶對多數を擁し眞向より庶二無二議會を乗切らふとの策に出でたのだ、此れに對して、一方在野の陣容は奈何にとあればこれ又濱口民政以下百八十二名、革新、明政の四、五新與無産黨の八名と歩調を揃へてザット二百二十餘名、數に於ては多少の遜色あれど既に過ぐる臨時議會以來政府與黨に大なる痛手を負はした例の優越問題、滿洲某重大事件、對支外交の失態それに近來頼みに世論の批難排斥を受けつゝある不戰條約文問題等攻め道具としては屈強の材料を持つて肉迫し堂々一舉に牝雄を決せんぞ在野黨の結束はいやが上にも固まり議會は未だ開會に到らざるに早くも政界の風雲急を告ぐるものがあつた。

處が此の時尤も不可解に堪へないのは例の政界の迷ひ兒床次以下二十八名の新黨俱樂部である、即ち是非々主義を標榜して今期議會のキャスティングポートは吾が掌中にありとばかりにすまし込で頗る曖昧なごつち付かすの態度を保持して容易に動かない、只兩軍の旗色奈何にと形勢の推移を眺めて居るのみであつた世人これを稱して洞ヶ峠の狸と呼んだ。

然ながら床次が此の洞ヶ峠に閉籠り政友民政の兩黨をして日夜お百度を踏ませ鼻の先でセラ笑つて、グンと納り返つて居るのも彼自身にして見れば或は好い鬱晴であつたかも知れないのだ。

「長らく續く不運、何時迄待つても、ごんなにあせつてもなかくに政權は廻つて來そうもない、おまけの果には松田源治、小川郷太郎、中村啓次郎等手鹽にかけた家子野郎からは、情誼に別れて大義に就く。なんて飛でもない捨臺詞で逃げ出されて了ふし、ごうせかうなりや自暴の勘八、此處らで一番朝野の二大政黨を頭から踏付けて俺の腕前の程を世間の奴等に見せてやらう後は野となれ山となれだ」てな調子だから誠に物騒千萬な話し

處で何と云つても今期議會にあつては、此の床次の去就奈何が直ちに議會の形勢を左右し、在朝在野兩黨の運命を決すると云ふ頗る重大性を帯びて居るのであるから田中政友にしる又濱口民政にしる迂活な眞似は出來ない、癪ではあるが一生懸命に御機嫌取をやつたものだ無氣味な洞ヶ峠も茲もと朝野兩黨の策士連が踵をついで殺倒すると云ふ權勢振り、扱て氣紛者の床次が愈々洞ヶ峠を下つて右するか左するか？ 此れからが愈々見ものである。

明れば一月二十四日、休會明けの議場は野黨の闘志蒙々として立のほり意外に險惡な氣が漂つて居た、田中首相兼外相、三土藏相の施設方針演説が終るや、先づ質問の第一矢を承つて民政の勇永井柳太郎は得意の外交問題を提げて悠々壇上に歩を運んだ、即ちその問ふ所は政府の對支政策の行詰りであり張學良勸告問題、滿洲某重大事件等從横に政府の急所を衝き更に鋭鋒を轉じて二回に亘る對支出兵は無用の沙汰であり、在留邦人の現地保護も特殊權益の守護も何等の効なく只彼等支那人の友感を買つた位がせきの山だと、大見得を切り、田中外交を骨破沫塵にこぎおろした。

又一方豫算委員會に於ては例の中野正剛が滿洲某重大事件に關しその真相を發表せよとて外相に肉迫した所が田中外相は目下日支當局に於て調査中に屬するから輕々に發表出來ぬと突放した、茲に於て中野は威丈高となり半歳も経過して今猶發表出來ぬとは何事だ、と云つて喰つてかゝつたが外相は只調査中の一點張りで取り合はない、然らば既に調査済の分だけを發表せよと益々激しく追及して容易に退かない、斯くして兩者の間に一週間に亘る猛烈な一騎打が演ぜられ今は外相もしごろもごろの態であつた、そこで政友會にあつては、事外交の機密に屬す

る問題を政争の具に共し事もあらふに暴露戰術に出でるとは怪しからん此れ即ち帝國の外交を不利に導くものであると、息巻き防戦大いに努めたが遂ひに一月三十一日、衆議院の本會議には此の滿洲某重大事件真相發表要求決議案なるものが上程されたのである。勿論民政黨は新黨俱樂部その他の小會派と秘かに結び、奇勝を此の一戦に期しての不意打ちである、政友會は周章狼狽した、殊に今議會最初の決戦である。此の一戦に萬一敗れるが如きことがあつては、さなきだに滿身瘡痕の我黨内閣、忽ちにして落城の悲運に立到るであらうと云ふので政府並に與黨の幹部は必死の防戦！又潛航艇は八方に飛んだ！

斯くて採決の結果惜い哉二十二票の差を以つて在野黨は敗れたのである、此の日民政黨は新黨俱樂部の應援を得て政府軍の虚を衝き「仕てやつたりとばかり」勇み立つて居たのであるがどうした事か此の大事な合戦に自黨に十八名の缺席者があり遂に涙を呑むに至つたのである、さても潛航艇の威力や恐るべしである。

越えて二月九日、愈々朝野兩黨が乾坤一番牝雄を決すべき晴日は來た、即ち民政黨の所謂總括的彈劾案上程がそれである、濱口民政黨總裁は自から陣頭に駒を進めてこれが説明演説

をなし、内政に外交に更に得意の財政論を掲げて金解禁問題に及び堂々一時間に亘り経倫を述べ大獅子吼を試みた、その眞執なる態度と水も漏らさぬ論調とは、悲壯なる決心と相俟つて頓みに在野側の士氣を鼓舞するものがあつた。

野黨に於ては先日の失敗に鑑み大いに結束を固め、此の一戦にこそ敵を一蹴して滿洲事件の敗を雪がんものと意氣軒昂、自づと鬼氣場に迫るの感があつた。

暫て兩黨の精銳は交々立つて賛成、反對の大論戦を闘はすのである。政友側にあつても此日の議場には特に重きを置き秦豊助、岡田忠彦、中村巍等何れも總務級の闘將を以つて此れに備へ猛襲！逆襲！果然一大舌戦は演出された。

今政友會の代表が不信任案に駁撃を加へて、「多士濟々たる民政黨も惜むらくば今日政權慾に捉はれ過ぎて居る爲め、事毎に正鴻なる判断を失して對支外交問題に付いても總て大外れの見當違ひをして居る、殊に甚たしきに至つては、攻撃に熱中する爲めに、遂に或は國民を欺き、或は國家の對外信用を失墜破壊するが如き言辭を弄して顧みない」とやらかした。

此の時、堪り兼ねた民政黨は猛烈に罵聲を浴せ、忽ち議場騒然として喧囂を極め、數名の民

政代議士は議長！議長！と連呼しながら壇上に押掛け演壇を占領して了つた、政友側又何を生意氣なとばかりが例の藤井達也、津雲國利等の剛勇を始め二、三の少壯連が飛出し此處彼處に取組合、議場は全く修羅場と化した、元田議長は已むなく非常の振鈴を振つたがなか／＼納らない遂にすつた揉んだの結果其の日は未了の儘に終り、翌十日再び暴狀の限りを働き二日かゝりて漸く討論終結、採決に移た、處が此の投票振りが又頗る珍妙な變つたもので此れ民政黨ならではの奇策である、誰人と雖も恐らく其の底劣さ加減には呆然たらざるを得ないであらふ。

即ち書記官が氏名を読み上げ順次議席を離れて投票に行くのであるが、今用紙を手にした民政議員はのそり／＼と重い足を引摺りながら一寸刻に歩を運ぶ否一足進んで一足退くと云ふ具合、宛然田舎の葬式を見て居る様なものだ、だから一人が投票を済ませるのにどうしても十分乃至十五分はかゝる、中には南無阿彌陀佛と口荒ながらノソリ／＼と往く洒落者もあるのだから堪らない、兎に角議會開設以來の亂闘騒の後に、かうした議事延張策をやり彼等が政權慾を満さんが爲めの不信任案も漸く終りを告げたのであるが採決の結果は總投票數四百三十四、賛成百八十四、反對二百四十九、即ち政友、新黨の反對で六十五票の差を以つて民政黨の不信任

案は又しても葬り去られたのである。

最早かうなつては民政黨が折角締てかゝつた禪もすつかり弛んで了つた、其後も腹癒せ紛れに議長不信任案、帝都治案決議案、或は豫算案返上など大いに力んで見たが、既に床次新黨を抱き込んだ政府軍の爲め常に眞向から蹂躪されて手も足も出なかつた。

又政友會の一枚看板たる地祖並に營業收益稅地方委譲に關する所謂兩稅委讓案は、豫ねて委員會に於て審議中であつたが、委員會で可決した結果二月二十一日の本會議に報告討議された民政黨は例に依つて極力反駁を試みたが此れ又多數を以つて衆議院を通過したのである。

更に一筆すべきは床次新黨が政友會と提携して閉會間際の議會に「現行中選舉區制を廢して小選舉區制に還元すべし」との選舉法改正案を提出した事である、選舉權の擴張と共に選舉區も大きくなるのが當然であるのに此は又何を血迷つてのタワ事か、考へても見るが好い、中選舉區は小選舉區に比し死票も遙かに尠なくて濟むし番狂はせや覗ひ打が容易に出來なくなつて了ふ、そりや小選舉區にすれば投票買收をしたり、官憲濫用の選舉干渉をするのには好都合であるかも知れんが、何時迄そんなタワ事をして國政を紊そうとするのだ、併しこれには又彼等に

に大なる魄膽があつたのだ！

即ち兩稅委讓案を始め多くの重大法案が、貴族院で行惱み、否決若くば審議未了の運命に陥つて居る、そこで一方小選舉區制還元案で「解散」の氣勢を見せて威脅すと共に、新黨俱樂部をして御用黨たるの色彩を明瞭ならしめ、貴族院の床次系を操縦して、他の重大法案通過の途を開かうといふのである。

政府が自ら提案せずして兩黨の共同提案としたのもこゝだ、只それ自黨の面目を立てんが爲めには憲政の逆轉も何もあつたものではない彼等のこゝした惡辣極まる妄動には流石の貴族院もほど／＼愛想をつかして居た、だから曩きに「田中内閣總理大臣の措置に關する問責決議」の時には躍起になつて惡辣な運動を試みたものであつたが、既に御機嫌を損ねた貴族院は、二十三票の大差を以つて該案を可決したものであつた。

而も此の時の新渡戸稻造博士の熱辯は實に痛快を極めたる近來の名演説であつた。

「田中首相は思想善導を口にした、これは國民全部の耳を打つた、しかし國民は目で何を見たか、首相が皇室に對し輕卒不謹慎であつたことである、百聞は一見に如かず、首相は耳によ

つて思想善導をやつても、目で思想を悪化せしむるの憾みはないであらうか」

この聲涙共に下るの熱辯に、滿場寂として聲なく、博士の一言一句を聞漏らさじと傾聴した
議場といはず、傍聴席といはず滿場、悉く泣いた、此れ眞に憂國慨世の雄叫びであり、三寸不
爛の舌頭より迸しる忠誠の言は遂ひに貴族院の空氣を一掃し、惹いては全國民の心胸を根底か
ら動かしたのである。

それはさて、貴族院の空氣が斯くも險惡なる以上政府並に與黨が奈何に陰謀を逞しうするこ
もそれは結局徒勞に歸するの外なかつた。果して兩稅委讓案を初め其他の重要法案悉く握り
潰しの悲運に接したのであつた。

茲に於てか、世上早くも内閣總辭職、或は衆議院解散等の憶説が傳はり、第五十六議會閉會
後の田中内閣は全く四面楚歌の裡に置かれたのであつた。

終結編

不良代議士辭職勸告論

立憲治下に於て輿論代表の府たる衆議院が却つて國民から非難斥排され、或は蛇蝎視され今
や我國の衆議院は全國民怨嗟の的となつて居る、更に甚だしきは衆議院無用論を唱へる者さへ
あると云ふ始末、てもはや感心！、否寒心せざるを得ないのである、

と云つても衆議院の腐敗墮落は獨り我日本の專賣特許かといふと滿更そうでもない、現に英
國の如き立憲政治の本家本元でも、佛蘭西、獨逸等の先進國でも必らず一度は腐敗、墮落の道
程を辿り、然る後今日の如く憲政有終の美を濟すに至つたのである、それを思へば左程心配に
も及ぶまい。

されど吾等が今靜かに此等先進國の議會史を繙き彼我對照を試みるならば、我國のそれは餘
りに惡質であり、深刻であり、底劣であるのに今更ながら驚かされるのである、此れ吾人が衷
心より寒心せざるを得ない所以である。

殊に最近に於ける五十六議會の底劣さ加減はどうか、恬で筆舌の限りではない、世界何れの

國の議會にあの醜状を見出す事が出来やう？。

私は今日、我が日本に憲法ありと雖も中央政治に立憲政治の實なく形式的に帝國議會なるもの有れど内容は何等議會たるの實質權能を具へずと斷言して憚らないのであります。政は正なり。此の一言こそ古今東西を通じて未來永劫の真理である、政治の要諦は常に正義に立脚して居なければならぬ、然るに現今の日本政治は奈何か、日本の爲政者の政は正に非らずして不正であり、偽りと陰謀とは常に彼等の本領である、日本の政治史を顧みると選舉違反と收賄と更に議會に於ける暴行とは將に世界隨一である、論より證據第五十六議會は最も雄辯に此れを證明して居るではないか、衆議員諸君は議會の標本が如何なるものか、又憲法の精神が那邊にあるかを吾等の前に判然と示して呉れた、そうして醜陋の限りを極めたあの暴状と匹夫野人の心事とを遺憾なく暴露した、さても困つた不良議員が揃ひも揃つたものだ、國民の選良たる議員諸君は一體議會を何と心得て居るのか、料理屋か居酒屋と取違へて居る不心得者が居るのであるまいか、何しろ院内の食堂で一日に賣れる酒が四斗樽三丁乃至四丁と云ふのだから全く驚くの外はない、極めて謙嚴なる態度で國政を審議しなければならぬ場所であるのに酒に酔泥

れて取組合ひの大喧嘩を打卷り而も流血の慘事迄惹起するとは何事か、そんな事で經國の大計を確立する重大な責任が果せると思つて居るのか。

殊に畏くも議場の正面には 陛下の玉座がある、而も開院式當日には陛下御自ら御親臨遊ばされ

「卿等慎重審議シ以テ協贊ノ任ヲ致セヨ」との有難き御聖勅まで拜受したる諸君ではないかその身を忘れて此の有難き玉座の前に何たる不謹慎な眞似をするのか、昔は將軍の御座所さへ背を向ける事が出来なかつたものである。それは決して虚禮ではない、即ち皇室の代理行爲を承る將軍に對して心からなる敬意の現れなのである。

まして絶對主權者にあらせられる 陛下の玉座である以上たとへ陛下が御親臨ましまさなくとも、現に陛下が御高覽遊ばすと云ふ心持で謹慎すべきが當然であらふ、さすれば議場に於て取組合ひや尻卷りや或は馬鹿だの泥棒だのと市井の無賴漢でさへやり兼ねるやうな醜態を演じなくとも濟むのだ、それとも斯如き態度でなければ立憲政治の本能を發揮する事が出来ぬと云ふ事であれば、一層のこと衆議院を那須野ヶ原にでも移轉して大々的に亂闘騒をやれば好いじや

ないか、全く諸君のそうした不謹慎極まる言動は不敬漢なりと呼ばれても一言半句辯明の余地があるまい。

斯くして不賢明なる議員諸君は益々墮落し遂には衆議院の信用を今日の如く失墜して了つたのである、吾人は議會に於て不祥事件の起る毎にそれ等不良代議士の淺ましい心根を憫れむと同時にその身分を辨へざる不心得を徹底的に糾弾しなければならぬと思ふ。

處がこうした議員連中の中にも又不思議や謹慎そのもの、如き人達を發見する事が出来る、あゝ！ 感心なものだ、流石は思慮分別ある年配の御人ばかりだとうつかり安心をして居ると之はさうだ、此の人達こそ一皮脱げば九尾の怪狐よりも佐賀の化猫よりも神通自在の古狸なのだ、砂利を食つたり瓦斯を吸つたり或は延々長蛇の如きレールを物の見事に呑み込んだりしたのも皆此等の人々だ、松島事件の上まいをはねたのも三百萬圓の灯提打ちをしたのも皆此の人々なのである、さても恐ろしい古狸共ではないか。

それでは此の古狸や無頼漢に等しい連中がどうし衆議院に議席を占むるに至つたか、そこだ即ち彼等の身元調査をする必要がある、それは今まで山寒僻地であつた所の田舎の大地主や

三百や、モグリ等が時世の進運や都市の發展に連れ電車や鐵道が敷かれ、従つて土地が高く賣れたり、又思ひ掛ない金儲けをしたのですつかり有頂天になり、柄にもなく代議士にでもなつてやれ！、そうすりや案外ポロイ儲けもあらふ、というので醜い因縁や情實で有権者を買収しそれ下當選した田吾作連中はかりなのだ。

「江戸さ喧嘩ごん打ちに行くべわ！」てな氣持ちで議會に臨むと云ふのだから堪らない、だから神聖なるべき議場が修羅の巷と化したり、繩簾の居酒屋と間違へられたりするものも亦宜なる哉である。

考へて見れば吾々國民こそ好い迷惑である、舊藩時代は町人百姓と人間並みの扱ひはされず御維新以來憲法政治が布かれて四民平等やれ嬉しやと思へば肝腎の帝國議會はこんな態、而も不良議員共は喧嘩や泥棒をすることが立憲政治の本分と心得て居るのだから始末におえぬ。

斯る不良議員共は須らく自ら反省して一日も早く其の罪を闕下に伏して謝すべきである。然し老人の冷水で、それは尤だが自分等の引込込後が心配だと云ふかも知れない、それならば心配御無用、後には純真なる我等青年が大なる抱負經綸と殉國的精神を以つて國運の進展を

計るから十二分に安心するが好い。

不良代議士諸君！諸君は唯潔よく退いて後進者の進路を開き、過去に於ける罪劫消滅の爲め彌陀の前に静座して懺悔生活でもなされい、それが今となつては諸君の取るべき最善の道であり、併せて皇國に忠誠なる所以である、死すべき時に死せざれば來るべき總選挙に醜き屍を晒らして世人の物笑ひともならう。吾人は茲に皇國將來の爲め又一は不良代議士諸君自身の爲め敢えて此の論をなすものである。

◆附記 此の稿を了つてから田中政友内閣も例の満州事件、不戦條約問題等の暗礁に乗り上げさう／＼投げ出して了つた、政權は長らく受難續きの民政黨に渡されたが少數黨の濱口内閣が果して何處まで其所信を斷行し得るか、又滿州事件の真相發表を迫まつた民政黨が代つて其真相を發表するの勇氣ありや、更に金解禁の即行、不景氣挽回等國民への公約は多い、兎に角此れからが見ものである。

筆者は次編に於て田中内閣總辭職と濱口内閣成立に就ての某方面の策動から説起することを讀者諸君に約して一先づ擱筆することにしやう。

(終り)

昭和五年十月二十日第一版印刷納本
昭和五年十月二十五日發行
昭和五年十月廿五日第二版印刷納本
昭和五年十二月一日發行

政談 大正昭和政變史(續)

定價 金壹圓五拾錢

著作 濱田一平
發行者 濱田一平

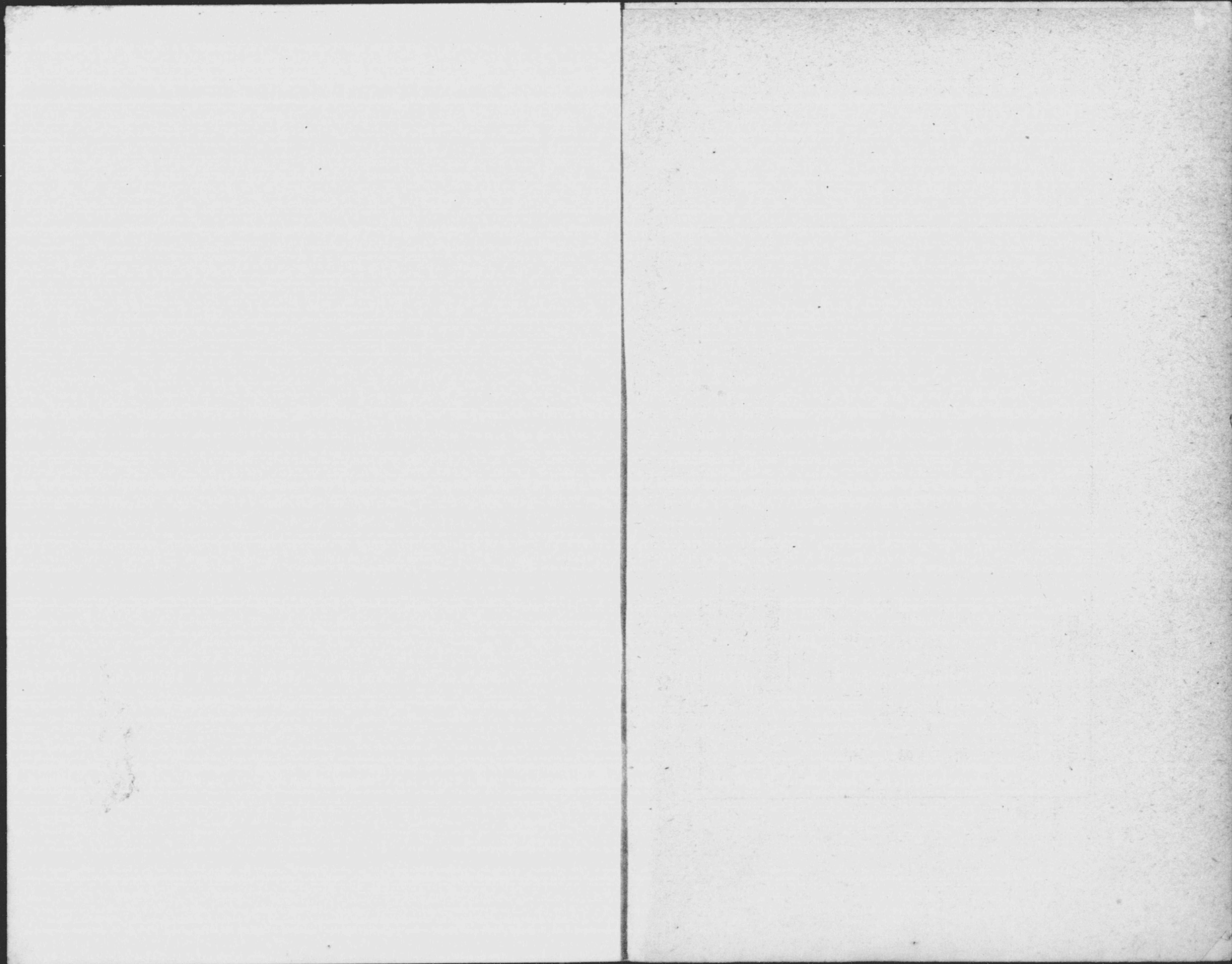
不許
複製

印刷人 河井金次郎
印刷所 大阪市北區曾根崎上一丁目八八番地
河井印刷所

大阪市天王寺區堂ヶ芝町一四番地

國論統一會議常務局

電話 南二五九〇番
振替口座大阪八〇二八三番



600
173

